

あとがき

駒井哲郎と詩人の心

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は17回目を迎えるが、今回は駒井哲郎(1920-76)である。

展示作品はすべて銅版画で、1950年代の作品を中心に1938年作「丸の内風景」から1964年作「断面」に至る40点余の展示である。駒井哲郎の初期の代表的な作品がほぼ網羅される展覧会となった。会期は7月1日(火)から31日(木)まで。(日・月・祭休廊)

これら展示作品の大半は駒井美子夫人の所蔵作品であるが、その他大岡信、馬場駿吉、山口勝弘の皆さんからお借りし、それに当画廊のコレクション等を加えて構成されている。貴重な作品を、この展覧会のために快くお貸しいただいた各氏に厚く御礼申し上げます。

カタログのテキストは大岡信、馬場駿吉、駒井美子の三氏からご寄稿いただいた。読者が直接それぞれの文章をお読みいただくのが一番であるが、私も若干私の思いを書き加えたい気持ちが起り筆をとることにした。

大岡信「50年代の駒井哲郎と伊達得夫、そして私」は、いまや現代詩の名編集者として伝説的な存在となっている書肆ユリイカの社主故伊達得夫氏の企画による“ユリイカ詩画展”(1958年3月)で、大岡さんが駒井哲郎と共作することになった経緯、顛末が述べられている。駒井哲郎の制作過程での苦しみ、なげき、ボヤキ。しかしながらその結果生まれてきた作品は、逆に一点のその影すらも止めない幸福感と

安らぎに満ちた見事さ。それが駒井の芸術だと大岡さんは讃えている。

駒井哲郎の銅版画の技術水準は群を抜き、世界的にみて超一流である。銅版画の伝統のないこの国では希有なことである。それに支えられて駒井の詩的精神が表現されている。詩人の魂を持った作家である。美術から文学的なものを排除し、絵画は絵画のみの自律性を主張する考えがある。私はそれはそれとして理解している。しかし所詮、絵画は生身の人間が創り出すものである。詩的な心を失っては作品は無機質な冷たいものになるほかない。いま現代美術に求められているのは、強靱かつ高質な詩的精神であろう。現在の閉鎖的な美術文化の状況を突き破って行くエネルギーは駒井の作品が内蔵しているような詩的精神ではなかろうか？ 話はとんだところまでとんでしまったけれども、このところ、私の想いはこんなところにあるのである。

馬場駿吉「時代の扉としての銅版画家駒井哲郎」は馬場さんの句集「断面」(1964年)の出版にかかわる駒井哲郎の制作過程が記されている。運悪く自動車事故にぶつかり肉体的にも精神的にも危機的状況にあった駒井哲郎が、いかに誠実にしごとに取り組み、その結果素晴らしい作品「断面」を創り出したかを、馬場さんは駒井の日記を読みとり、分析し、明らかにしている。これは作家の作品創造の深奥に迫る貴重な記録である。

馬場さんは何時ぞや、「私の現代美術開眼は駒井哲郎です。」と私に話されたのを今もよく憶えている。両者の出会いはすばらしい。うらやましいなと私は思う。

駒井美子「1950年代の瀧口修造と駒井哲郎」には、

駒井哲郎のM夫人あての日記風の手紙から瀧口修造に関する部分が示されている。興味深いのは駒井哲郎が瀧口修造に初めて会って話した時の印象が記されているところである。1950年12月16日の瀧口修造の風貌がみえてくるのだ。時に瀧口47歳、駒井30歳。駒井哲郎の眼を通して見えてくる瀧口修造の人間像が私にはなつかしい。と同時に駒井哲郎の姿も見えてくるのだ。

このM夫人のことおよびM夫人あての駒井書簡については中村稔著『東の間の幻影——銅版画家駒井哲郎の生涯』(1991年新潮社刊)の第5章「東の間の幻影」(p.108-128)に詳しい。また「R夫人の肖像」(1950年)の作品はM夫人がモデルで、この展覧会にも展示されている。

駒井夫妻の結婚式(1956年10月6日)に際して祝辞を述べられた三人の人物が素晴らしい。岡鹿之介、堀口大学そして瀧口修造である。この三人に共通しているところは詩人の心である。岡鹿之介は画家であるが、詩人の心をもった画家である。当代きっての画家、詩人、美術評論家にして詩人の三先輩が駒井哲郎の才能をいかに高く評価しており、その前途を期待していたかが見えてくるのである。

ところがこの大事な御三方のスピーチは、どなたも声が小さく、マイクもない時代で、駒井夫人の耳には届かなかったと記されている。これには思わず微笑んでしまった。

駒井夫人のお話では、駒井はP・クレーの影響を受けたことは確かだが、それに劣らず、M・エルンストからも強い影響を受けていたと言われる。フランス留学(1954/3~55/12)を終え帰国した駒井から、エルンストのことをよく聞かされた、と言われる。

私もこのクレーとエルンストは大好きで、この二人の作家について調べているが、1919年、エルンストはクレーを訪問し、その後文通している。この二人には交流があり、その結果、クレーについてはエルンストからA・ブルトン、P・エリュアールへとつながり、ブルトンのシュルレアリスム機関誌「シュルレアリスム革命」1925年、No.3にはシュルレアリストではないクレーがシュルレアリスムの先達者としてとり上げられるのである。

そのブルトンの直弟子で祖述者がシュルレアリスト瀧口修造であり、実験工房のリーダーである。そのメンバーの一員が駒井哲郎である。ところが実験工房の造型部門のメンバーをみてもシュルレアリストは見当らない。唯一、シュルレアリスムに近い存在が駒井哲郎なのだ。駒井は他のメンバーと肌合いが違う。この辺の事情を山口勝弘さんにおききしたが、駒井の参加は瀧口修造の推薦によるもので、少し遅れて入られたと言う。駒井はそのシュルレアリスムの、詩人的体質において瀧口修造にもっとも近い存在であったと言えよう。駒井の参加が、実験工房の活動に良い結果が生れると瀧口先生は考えられたのではないかと私には思われる。

以上、御三方の文章に触発されて述べた。ここに、お忙しいなか貴重な文章をご寄稿いただいた大岡信、馬場駿吉、駒井美子の御三方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

さて、最後に、駒井哲郎と私の出会いはどうであったか？ 私の出会いの意識は安東次男との詩画集「人それを呼んで反歌という」(1966年)にある。当時私は銀行に勤めており、ささやかなコレクターであった。駒井哲郎の版画も数点買い求めた記憶があるが、もっとも印象が強いのはこの詩画集である。

恐らく1967年の春の某月某日、お茶の水の駅近く
ときいた版元エスパース画廊をさがし当て、買い求め
たのを鮮やかに憶えている。お天気の良い日であった。

そのなかの作品「食卓にて、夏の終りに」は私の心
を打った。あの葡萄酒の瓶のすこし、ほんのわずか、
右側に揺れている絶妙のバランスに私の心は揺れ
た。今も揺れている。駒井哲郎の秀作5点を選ぶとし
たら、私の思い入れ一番のこの作品を私はまず選ぶ
であろう。

1997年6月10日

佐谷画廊 佐谷和彦

[追記]

昨年(2016年)の第16回オマージュ瀧口修造「七つの詩」展に
ついて、この展覧会の企画につき貴重なご提言をい
ただいた土渕信彦氏に対する謝意が、不覚にも脱落
しておりました。遅ればせながら、ここに深甚なる謝意
を表すものであります。大変失礼いたしました。